

風と水と土と

ひょうごテロワール

11 沼島のアジ

石井さんが1匹ずつ丁寧に釣り上げるアジ＝南あわじ市沼島沖



勾玉(まがたま)のような形といわれる沼島。国生み神話の「オノコ島」といわれる。



「きたっ」。小雨の朝、一本釣り漁師の石井和夫さんが指先で手応えを確かめながら、糸を引き上げる。掛かっていたのは大きくてふっくらとしたアジだ。「晴れの日には体がきれいに光る」という。口元を針外しに当てると、魚体が滑り台のようなパイプを通っていけすに収まった。魚を傷めないよう、人の手が触れることなく釣り上げる工夫。多彩な自然に恵まれた兵庫の優れた食材を、テロワールの視点で掘り下げる連載の11回は南あわじ市、沼島のアジを紹介する。

(辻本 好)

手釣りで守る 黄金の魚体

沼島は淡路島の南4kmに浮かぶ周囲10kmほどの島だ。西には瀬戸内海、東には紀伊水道があり、南に太平洋とつながる紀伊水道が広がる。淡路島との間には、関東から九州まで延びる中央構造線が通り、地質は淡路島以北と全く異なる。緑や赤の結晶片岩が露出され、世界でも珍しい「さや状褶曲」や国生み神話の土立神岩がある。地形・地質の資源が豊かな島だ。

太った「瀬付きアジ」

淡路島の土生港との間で、1日に10便の沼島汽船が行き来する。人口約400人のうち漁業者が100人近い漁業の島で、タイ、ハモと並ぶ島の自慢が「黄アジ」と呼ばれるマアジだ。4〜9月ごろが漁獲シーズンという。

沼島は淡路島の南4kmに浮かぶ周囲10kmほどの島だ。西には瀬戸内海、東には紀伊水道があり、南に太平洋とつながる紀伊水道が広がる。淡路島との間には、関東から九州まで延びる中央構造線が通り、地質は淡路島以北と全く異なる。緑や赤の結晶片岩が露出され、世界でも珍しい「さや状褶曲」や国生み神話の土立神岩がある。地形・地質の資源が豊かな島だ。



「ぬしめアジ」(ブランド)のタグがつけられた一本釣りのアジを料理店「水車」で調理してもらった刺身。食べるには予約が必要だ。

温暖化と海の栄養減

沼島のアジは今も、東京のすし店などで高級魚として人気がある。島では40人ほどが一本釣り漁の伝統を受け継いでいるが、近年は海の異変と漁獲量の減少に悩まされている。

「去年も捕れなかったが、今年も6月途中から減っている。例年の4分の1くらいの感覚」。前述の漁師、石井さんたちが感じる異変の一つは温暖化だ。瀬戸内海特有の冬の季節風が弱い年が多く、海水温が下がらない。南の海の魚を見ることが増えた。もう一つの気掛かりは海がきれいになりすぎていることだ。下水処理で陸地の糞尿やリンなどの栄養分が海に供給されず、この状態が続くと海の生態系は壊れてしまう。

直接出荷する若手漁師グループ「沼島一本釣り産直部」の代表の上野安文さんは「今は漁獲が不安定で、注文があっても十分に届かない状態。ほんまは地元の神戸、関西に届けたい」と話す。

この特別なアジの価値を見いだしたのは半世紀ほど前、全国の魚を扱う東京・築地市場の関係者だったよう。

2020年9月に現役を引退した東京・新橋の第三喜楽館のすし職人、長山一夫さんが著した「江戸前職人入贅書き 増補」に、沼島のアジとの出会いが詳しく記されている。

昭和40年代後半、東京湾や相模湾でヒラアジ(キアジ)の入荷が減っていたころ、淡路の荷受会社が築地に持ち込んだ沼島のアジが評判になった。全国各地から集まるものとは一味違っていたという。長山さんは1987(昭和62)年、鮮度の良さとうまさの秘密を解明しようと、沼島を初めて訪れた。

そこで、切魚体(手釣)に触れない一本釣り漁師の繊細な漁の営みと、海水と水を生かす荷受会社の浜締めなど、魚を扱う高い技術に驚いた。

魚の見方やうまさのどちらか一方、仕入れの考え方の原点となったという旅を経て、沼島のアジについて客に正確に伝える料理人としての役割を強く自覚した、と著書に書き記している。

◇今回は8月28日に掲載します。

「風と水と土と」は、ひょうごテロワール旅を広げる「兵庫デスティネーションキャンペーン(兵庫DC)」を応援する連載です。

地エネと環境の地域デザインとは

エネルギーと環境の視点から、新しい地域デザインを描くためのプラットフォーム

シンポジウム、地エネツアー

メルマガ(関連記事、コラム)

地エネnote(会員や事業の紹介)

ローカルSDGsビジネスのモデルづくり

地エネの酒 for SDGs プロジェクト

食と農の廃棄物から自然エネルギーのバイオガスをつくる際に得られる有機肥「消化液」で酒米山田錦を育て、純米吟醸酒「環」を醸す。日本酒分科会の4蔵と4農家、神戸新聞社で2020年にスタートしました。

地エネと環境の地域デザイン

名称

地エネと環境の地域デザイン協議会

代表者

神戸新聞社 メディアビジネス局長 吉松一郎

住所

神戸市中央区東川崎町1-5-7 (神戸新聞社メディアビジネス局内)

事業内容

地域の自然エネルギー(地エネ)を生かした地域のデザインを考える。

会員

法人・団体 約30社 (2022年4月現在)

詳しくは地エネnoteのwebページへ



環(めぐる)の販売などは
QRコードからご参照ください